

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 31 日現在

機関番号：32644

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720077

研究課題名（和文） 日本近代文学におけるアメリカの dime novels の影響

研究課題名（英文） A study in modern Japanese literature influenced by American dime novels

研究代表者

堀 啓子 (HORI KEIKO)

東海大学・文学部・准教授

研究者番号：60408052

研究成果の概要（和文）：

尾崎紅葉、黒岩涙香、小栗風葉などの翻案作品の原作を措定し、比較研究を行った。なかでも尾崎紅葉に関しては、2012年6月に、尾崎紅葉の『不言不語』およびその原作に関して比較考証した拙著『和装のヴィクトリア文学』（東海大学出版会）を上梓する。同著では、その作家の生誕地である英国東北部の土地 Hinckly に赴き、その作品の創作背景および読者受容、輸出に至った経緯についても調査した内容を盛り込み、原作の拙訳も併載した。

研究成果の概要（英文）：

After conducting research on the original dime novels that were adapted into Japanese by Ozaki Koyo, Kuroiwa Ruikoh and Oguri Fuyoh, it became evident that the Japanese authors were heavily influenced by them. The study regarding the works of Ozaki Koyo will be published in June 2012 and will be titled: Victorian literature dressed in Japanese style.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1900,000	570,000	2470,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：近・現代文学

## 1. 研究開始当初の背景

従来この分野は、日本の近代名作との関連を重視されつつも、研究がほとんどなされてこなかった背景がある。外国の、しかも廉価で大量出版された小説の調査が事実上、不可能と看做されてきたためである。

確かに dime novels の背景は極めて複雑である。dime novels は、一冊あたり 1 dime (= 10 cents) で販売されたことから、そう称された。大変な人気の背景には、その廉価とともに、魅力的な無名作品を収めたラインナップがある。だが一方で、海賊版や偽版も多々横行し、体系的な網羅は極めて困難となった。

剩え、読み捨て本という認識ゆえにその殆どは散佚し、現在ではアメリカ本国でも、The Library of Congress や一部の大学附属図書館を除き、まとまった数での所蔵はない。こうした状況下、dime novels の中から個々の翻案作品の原著を探し当て、比較対照する作業はあまりにも煩瑣と考えられてきたのである。

だが、これらの dime novels は、その廉価ゆえに同時代の日本にも多く輸入され、多くの文士が落掌している。そして、無名作者の無名作品でありながら、極めて魅力的なストーリーテリングが、幾人もの文士の心を捉え、彼らにその〈翻案〉を想起させた。古典名著の〈翻訳〉ではなく、名もない作品をもとにした〈翻案〉である。彼らがその原著名や、原作者名、時によってはそれが翻案であることさえ表明せず、彼ら自身の作としてこれらを発表したのは、その意識差に拠るものである。

以上を以て、報告者はこの研究が、専門家のみならず、広く一般の文学愛好者、延いては諸外国からも注目されうる分野である可能性を秘めていると愚考した。文学青史には存在しなかった、日本近代文学の新しい側面を浮き彫りにし、その位置づけを再考したいというのがこの研究課題を選ぶに至った背景および動機である。

## 2. 研究の目的

当初の、本研究の目的は、十九世紀末のアメリカで出版された dime novels が、日本近代文学に与えた構想上の影響を調査することで、具体的には、

- ① dime novels をもとに、翻案として発表された近代日本の個々の作品の原著を措定すること
- ② それらが、どのように原作を模しているか系統的に整理すること
- ③ その調査結果のよって、同時代の日本文学が、文士たちの手でどのように外国文学から換骨奪胎され、独自の近代小説としてのスタイルを確立していったかを、明らかにすること

であった。

たとえば、こうした翻案者の一人と目されている徳田秋聲は、その自叙伝的作品『光を追うて』(1938年)の中で、明治二十年後半、等(ひとし)という青年が師と仰ぐ文士と初めて出会う場面を、描出している。そこでは、こうしたアメリカの dime novels がきわめて粗雑に、しかし非常になじみやすい洋書として、便利な下敷きとして扱われていたという。

この『光を追うて』が自伝的小説であったことに鑑みると、これは、文士たちの生活のごくありふれた日常の一場面と考えられる。

ここでは、アメリカの赤本と称された dime novel をもとに、主人公の青年がつくりあげた短篇が後日、新聞小説として発表されることになっている。すなわち dime novels は、ごく日常的に、文士たちの日々の執筆のための下敷き・下絵として、もぎ取られ、書き込まれ、文字通り換骨奪胎されてそれぞれの作品へと写し換えられていた事になる。

彼らは dime novels を自らの中に取り込み、自家薬籠中の物とすることによって、〈翻案〉を生み出したのである。そこには何の気負いもなく、衒いもない。ごく自然な発想である。

そして不思議なことに、こうして dime novels を下敷きに発表された〈翻案〉は、いずれも人気作品となり、現代でも名作の誉れ高い金字塔が多い。

よって、たとえその原著が、いわゆる”out of canon”(正典の外なるもの)であり、資料収集が困難であろうとも、研究を進める価値は、あると考えられた。

そして上記①から③の研究工程を経ることで、無名作品特有の魅力的なストーリー展開・異国情緒と、文士の独自世界・日本の心的態度がいかに融合され、いかに日本人にとって魅力的な作品を生成しえたのか、同時代読者の受容や嗜好とともに明らかにすることを目的とした。

## 3. 研究の方法

本計画の遂行に、最も重要となったのが、できるだけ多くの dime novels を確認することであった。ただ dime novels は、日本では全国の図書館に僅か数冊しか現存していない。

したがって、実質上の調査は外国での確認作業から始まったことになるが、dime novels を100冊以上所蔵するのは、世界でも、アメリカ及びイギリスにおける大学附属や国立などの図書館、5箇所のみである。

よって、本研究のために長期休暇を利用してこれら全ての図書館をまわり、確認作業をおこなってきた。またこれと並行して、文士の書簡や手記など国内各地で入手可能な、補足となる資料も含め、収集した資料を用いる具体的な比較対照作業と分析は、国内でおこなってきた。

従来の報告者自身の研究の前段階としては、主として領域をアメリカ側から限定し、作者も絞った研究を進めてきた。だが本研究よりその研究範囲を広げ、日本側の翻案作品から逆に dime novels 中の原著を辿る作業に着手した。

具体的には、dime novels をもとに翻案を手がけ、好評を博した文士を2つのグループに

分類し、まずは明治を中心に活躍した小栗風葉、森田思軒、柳川春葉の三作家の翻案の原著を指定することに集中した。

また、この研究に於いては、調査対象とする dime novels のシリーズを限定することで、不用意な研究作業の拡散を避け、混乱を減じることと、予てより報告者が協力指導を戴いてきた dime novels 研究の専門家たちに、欧米研究者側の視点による教示を仰ぎ、研究の停滞を最小限にとどめるよう努めた。

dime novels を日本側から辿る以上、調査は、当時日本に輸入されていたシリーズのみに限定できた。これは、「当時アメリカでは南北戦争後のダイム・ノベルの氾濫時代で、そういう廉価本が日本にも輸入されていた。黒岩涙香は若い時分貧乏で、語学の勉強に輸入された廉価本をむやみに読んだ。それらは『シーサイド・ライブラリー』や『ラヴェル・ライブラリー』などで(下略)」(中島河太郎『創作推理小説の誕生』1953年)や、「森田思軒が取寄せてよんだヴェルヌの英訳は、主としてシーサイド・ライブラリーやラベル・ライブラリーであったらしい」(木村毅『大衆文学発達史』1933年)など多くの文献で言及され、その輸入事實は、丸善本店に所蔵される当時の輸入書籍目録でも確認される。

この、Munro 社の The Seaside Library と Lovell 社の Lovell's Library という両叢書に関しては、報告者は総目録の提供を受けており、速やかにタイトルを絞り込んだ調査の開始が可能となった。

ちなみに、英米の研究者諸氏や dime novelist のご子孫の方々が、本研究の理解者、奨励者であり、日本の〈翻案〉の生成過程に興味を持つ彼らは協力を惜しまれず、前述のリストを初め、個人所蔵の資料についてもいろいろご提供戴いた。とりわけ、dime novels 研究の第一人者である Randy Cox 教授 (Professor emeritus at St. Olaf college)、University of Minnesota の Karen Hoyle 博士および、一世を風靡した dime novelist の一人 Charlotte M. Brame 研究の権威である Gregory Drozd 氏 (Chief Executive of Voluntary Action Hinckley and Bosworth) に、報告者の研究が拠るところは大きかった。

#### 4. 研究成果

本研究においては最初に、できるだけ多くの dime novels を確認する作業に重点をおいた。そのため、国内外および英米の図書館における現地調査と原書(古書)の収集確認を目した。

具体的には、dime novels をもとに翻案を手がけて、好評を博した文士のなかで、「3. 研究の方法」欄で先にも述べた小栗風葉、森田思軒、柳川春葉の三作家の翻案の原著を辿

ることに集中し、とくに小栗風葉に焦点を当てた。

当時日本文士たちが日本にいながらにして入手しやすかったと思われる dime novels のシリーズは二つある。それらは、多くの文献で言及されてきた、アメリカのニューヨークにあった出版社 Munro 社の The Seaside Library と同じく Lovell 社の Lovell's Library という両叢書である。

報告者自身が所持する両叢書の出版全目録と、当時、洋書を専門に扱っていた丸善本店所蔵の同時代の輸入書籍リストの照合により、前述の文士たちが扱ったであろう可能性の高い原書をまず限定し、それらを順にあたって、彼らの個々の著作との共通性を確認する作業を研究の初段階とした。

続いて、黒岩涙香に関する記述を、涙香の文学背景から全般的にまとめて出版することを念頭に研究計画を進めた。その論文の中核とするのは、涙香がアメリカの dime novels を翻案し、『今日新聞』および『萬朝報』に連載することで一世を風靡した「法廷(ママ)の美人」、「嬢一代」「雪姫」などの新聞連載小説の成立背景である。そこには単に、涙香ひとりにとどまらない、同時代作家たちの翻訳、翻案手法が明らかにされていくからである。

そして並行的に尾崎紅葉が『読売新聞』に連載していた異色の人気小説「不言不語」についても論をまとめ、その原著である Bertha M. Clay という dime novelist の作品、*Between Two Sins* との、文体上の詳細な比較考証をおこないたい。両者比較のため、まずはこの *Between Two Sins* を邦訳し、この論考の中に併せて所収しておきたい。この原作者 Bertha M. Clay 本名 Charlotte M. Brame は、紅葉のみならず、前記の黒岩涙香や、ほかの同時代文士に相当愛読された原作者であった。そのため、彼女の生誕地である英国北部の土地 Hinckley に赴き、その作品の創作背景および読者受容、輸出に至った経緯なども、原作者側からの視点を通して確認した。

さらにこの研究の集大成として、dime novels 作家の中でもとくに人気の存在であった、Bertha M. Clay について、彼女の作品がいかにより多くの日本文士の名作に影響を与えていたかを体系的に整理した。すると浮上したのは、新たに一人、Bertha M. Clay の作品から構想を得ていた作者であり、その作品の原作を特定しえた。

それは明治から大正、昭和初期にかけて活躍した小栗風葉という作者である。風葉もまた他の作家たちと同様、Bertha M. Clay 作品の構想の一部をとって換骨奪胎し、日本化するという手法で翻案を創り、「奇縁」という邦題で上梓していた。ここで新たに注目すべ

きことは、これが、〈脚本〉であったということである。すなわち Bertha M. Clay の作品は日本の文学のなかでも小説のみならず、戯曲の分野にもその影響を与えていたという事実が、ここに判明したことになる。

これを受けて、本研究は Bertha M. Clay を中心に、日本の近代文学のなかでの dime novels の位置づけ、その存在意義を再考した。

また、当該研究の成果を受けて、2011 年 11 月には『新聞小説の魅力』（共著）を出版し、黒岩涙香の翻案背景についてまとめた。さらには、2012 年 6 月に、尾崎紅葉の翻案『不言不語』に関する拙著を上梓する。そのタイトルを『和装のヴィクトリア文学』（単著）とし、原作者の生誕地である英国北部の土地 Hinckly におもむき、その作品の創作背景および読者受容、輸出に至った経緯などにもふれた。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

- ① 堀啓子「小栗風葉作『脚本 奇縁』と原作者 Charlotte M. Brame」『比較文学』（日本比較文学会誌）査読有 第 53 巻 p p. 90-104 (2010)
- ② 堀啓子「尾崎紅葉の『金色夜叉』——ストーリーテリングは時空を越えて」『翻訳文学総合事典（研究編）』大空社 p p. 343~354 (2009) 査読無
- ③ 堀啓子「筆の魔術師・黒岩涙香——進化する翻訳」『翻訳文学総合事典（研究編）』大空社 p p. 334~343 (2009) 査読無

〔学会発表〕（計 0 件）

〔図書〕（計 2 件）

- ① 堀啓子 他「21 世紀における語ることの倫理」ひつじ書房 p p. 23-44 (2011)
- ② 堀啓子、他「新聞小説の魅力」東海大学出版会 p p 31-144 (2011)

〔その他〕

翻訳

- ① 堀啓子「Charlotte M. Brame 著「ドラ・ソーン」翻訳（2）」『東海大学紀要文学部』査読有 第 96 輯 p p 1-11 (2011)
- ② 堀啓子「Charlotte M. Brame 著「ドラ・ソーン」翻訳（1）」『東海大学紀要文学部』査読有 第 95 輯 p p 69-79 (2011)

部』査読有 第 95 輯 p p 69-79 (2011)

シンポジウム

- ① 堀啓子「名作は誰のもの？～アメリカの読み捨て本 vs. 明治文学の金字塔」ひつじ書房 20 周年記念シンポジウム (2010)

研究成果の社会還元・普及事業

- ① 堀啓子「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～ KAKENHI」（2010 年度）研究課題名：「明治の文豪になってみよう！」日本学術振興会 ひらめき☆ときめきサイエンス 2010 年度採択プログラム

<http://www.jsps.go.jp/hirameki/ht2200/ht22065.pdf>

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

堀 啓子 (HORI KEIKO)  
東海大学・文学部・准教授  
研究者番号：60408052